

めざせ雲龍ががんばれ琴奨菊関



身長179センチ、体重150キロ。力士としては決して大きいほうでない。立ち会いからの突き押しで一気に攻めるのが得意技

「東方、前頭7枚目、琴奨菊。福岡県柳川市出身、佐渡ヶ嶽部屋」。今月13日から福岡国際センターで始まった、今年納めの大相撲九州場所。会場にアナウンスが流れ、琴奨菊関が土俵に表れると、観客から大きな拍手が沸き起こります。本市出身の琴奨菊関(21歳)。プロ入りから4年足らずで前頭6枚目(先場所)まで昇進しました。柳川からは琴奨菊関をはじめ、横綱雲龍久吉、関脇大潮又吉など多くの力士が生まれています。どうして柳川の地に数多くの力士が生まれたのか。まずは、琴奨菊関のこれまでの歩みをたどってみましょう。

相撲を始めたのは小学3年生

しこ名は琴奨菊和弘(本名、菊次一弘)。昭和59年1月30日、建設業を営む菊次家の三男として、東宮永の佃町に生まれます。兄はいずれもスポーツ万能で、3つ上の兄は小学6年生のとき、陸上走り幅跳びで全国大会に出場。また1つ上の兄も高知県の明德義塾高校野球部で甲子園に出場するほどでした。当然、一弘くんも体を動かすのは大好きで、運動神経も抜群。地区対抗リレーや、子ども会のソフトボールチームの主要メンバーとして活躍します。体が大きかったことから、東宮永小

学校の2年生のときから柔道の地元道場「柳柔会」に所属し、めきめきと腕を上げ、大会があることに上位入賞を果たしていきました。

小学3年生のころ祖父・一男さん(73歳)の勧めもあり相撲を始めようになりま。4年生のとき青年会議所が主催していた「全国わんぱく相撲柳川場所」に出場。あれよあれよと勝ち進み優勝。東京で行われた全国大会では、32位の成績に輝き、相撲のとりこになっていきます。

そのころ柔道でも道場の主力メンバーだった一弘くん。柔道と相撲の大会が重なり道場に迷惑をかけることがあります。勝負がはっきりする相撲をやりたいたい」と、柔道をやめ本格的に相撲に専念するようになりました。

一弘くんにとって相撲の師匠は祖父・一男さんでした。一男さんは一弘くんに相撲を始めたところからの言いつ



元横綱琴奨 佐渡ヶ嶽親方 64歳

琴奨菊が稽古熱心というのは誰もが認めるところです。明るくて、素直、一生懸命な性格は、小さいころから少しも変わっていません。「俺は相撲しかない」と徹底的に稽古し、必死に努力しないと相撲は強くなりません。琴奨菊はそういう精神を持っています。私の部屋の宝ですね。



福岡県相撲連盟 理事長 成住 浩平さん 68歳

琴奨菊が子供のころから相撲の指導をしていました。琴奨菊には、小さいころから「相撲取りになりたい」という強い目標がありました。中学高校と明德で、厳しい練習に耐えてこられたのも目標があったから。彼は相撲に必要な「心技体」をバランスよく持っています。謙虚だし、精神力もすごい。もう三役まで手の届くところまで来ています。頂点目指しががんばってほしいですね。

琴奨菊の過去6場所成績

九州場所 (H16年11月)	十両 3枚目	10勝5敗
初場所 (H17年1月)	前頭16枚目	5勝10敗
春場所 (同3月)	十両 4枚目	13勝2敗
夏場所 (同5月)	前頭14枚目	10勝5敗
名古屋 (同7月)	前頭 9枚目	8勝7敗
秋場所 (同9月)	前頭 6枚目	7勝8敗
春場所	では十両優勝	

けがありました。一つは「勝ってもガッツポーズはするな」ということ。もう一つは「引く相撲をとるな」ということです。相手の顔に泥を塗るようなことはしてほしくない。そして相撲は真つ向から相手に向かわないと強くない。体でしっかりぶつかっていく相撲を学んでほしいという願いからでした。

相撲に専念するようになった一弘くんのために、一男さんは山川町から土運び、家の隣のゲートボール場の隅に土俵をつくりま。学校から帰ってきた一弘くんは毎日、一男さんからまわしを締めてもらい、自宅横の土俵で練習していきま。練習は、「四股ふみ」や「すり足」、土俵横に立てた電信柱に向かっの突っ張り稽古「鉄砲」などで体を温めたあと、田中實さん(藤吉・65歳)や県相撲連盟柳川・山門・三池支部長の堤

浩喜さん(5ページ左上)とのぶつかり稽古。わきを締めるため、ワラを一本はさみ、落ちないように相撲を取るなど、徹底的に基本をしこまれます。最後は、ダンブのタイヤをつけた鎖を自分の腰に巻き付け、ゲートボール場を何周も走りま。週に2、3回は、祖父の運転で北野町の相撲道場にも通いま。練習がきつかったり試合に負けたりして、泣くこともあつたそうです。しかし練習を休むことは一日もありませんでした。

練習熱心な一弘くんはめきめきと上達していきま。大和町で開かれる雲龍少年相撲大会では、5年、6年生連続で個人優勝。6年生のとき出場したわんぱく相撲大会では全国16位になりました。当時、学校の先生と相撲の練習をしたことがありま。ぶつかつた後、先生は急に息がでないほど苦しくなり、病院で診せたら骨にヒビが

入っていたというエピソードが残っているほど、当時から当たりはずば抜けていま。一方、体も大きく力も強かつた一弘くんは、正義感も強く友達思いでもありま。友達がいじめられると、真つ先に駆けつけ仲裁に入りま。そしてみんなから「かつくん、かつくん」と呼ばれて慕われていま。相撲が強くなるにつれ、相撲への思いも強くなつていきま。毎年九州場所が始まると、佐渡ヶ嶽部屋柳川支部の人たちが地元で招いた力士たちを、祖父と一緒に見に行くのを楽しみにしていま。わんぱく相撲全国大会で東京に行ったときは、佐渡ヶ嶽部屋親方からかわいがられました。そうしていくうちに相撲取りへの憧れはますます強くなつていきま。卒業文集に一弘くんは次のように書き残していま。